



いのちの水

目次

- ・ 日々私たちを担う主 2
- ・ 苦しみと主の真実 2
- ・ 地上では途切れ途切れであつてもー 7
- ・ ブラウニングの詩より 3
- ・ 川の流れのように 7
- ・ 心に残った御言葉 10
- ・ 加藤久仁子、林晴美 11
- ・ お知らせ 11
- ・ 近畿無教会集会 11

わが魂よ、なぜ打ち沈むのか。なぜうめいているのか。神を待ち望め。(詩編43の5) 主よ、あなたの慈しみは天にあり、その真実は雲にまで及ぶ。(詩編36の6)

二〇二五年 四月号 第七七〇号

日々私たちを担つてくださる主

だれでも、日々さまざまの重荷がある。それは小さな子供のときからはじまり、多数の子供たちが、学校にいかずに自宅に一人引きこもってしまう状況が増えつつある。

以前は引きこもりという児童生徒といった人たちのことを連想していたが、近年は、大人であつても、引きこもる人たちが増加して、最近のデータでは、15歳から64歳の年齢層では、約150万人もの人たちが、引きこもりという。

そのような状況は、それぞれの人が、学校や社会のなかで、何らかの圧迫、いじめ、仕事などの重荷を負つていてそれが苦しくて、人のなかに入つていけない、ということなどがあると考えられる。

たとえ家族であつても、その重荷のことを打ち明けることができない、だれにも言えない、それゆえに自宅にこもってしまう。

他方、自宅引きこもりでなくとも、他者に対して決して心のうちを打ち明ける人がいないということも多い。いくら表面的に友人や同僚と話していても、心は一人

で重荷を人知れず苦しむということもある。

そうしたあらゆる状況にあつて、ただ愛の神だけは、私たちの心の苦しみや悲しみ、孤独といったものを打ち明けてもきいてくださる。

日々、重荷を負っている私たちそのものを担つてくださるといふ実感はすでに数千年前から聖書では記されている。

：主をたたえよ
日々、わたしたちを担い、救われる神を。

この神はわたしたちの神、救いの御業の神

主、死から解き放つ神。

(詩篇68の20〜21)

私たちの日々は、さまざまの問題が生じてくる。子どもたちのとき、元気にあふれて

いてこの世の闇を知らないとき、あるいは成人してからも特別な事故や病氣、職業上でも困難など起こらない限り、自分の力で生きていくように思っていて、自分を担ってくれるものなど考えることもしない。

しかし、ひとたび病氣になり、苦しみにあえぐことになったり、家庭の問題が深刻な状況になったり、職場にて耐えられないようなことが生じたときには、生きていけないと感じることが生じる。

そうでなくとも、若きときから、すでにこの世の問題や人間関係に悩み、この世の闇を思い知らされたときには、やはり生きることに見えなくなるとなる。

そのようなとき、このみ言葉にあるように、日々私

ちを担って下さる神、その苦境から救って下さる神がおられるということを知ることはいかに大きな恵みとなることだろう。

自分で自分の苦しみや病氣を担えない―老齢になるとこれはいつそう切実になる。

自分の犯した罪ゆえに事態がもとに戻らないことを深く思うほど、その自らの罪をも負いきれないと感じることになる。

また、家族に難しい病氣をもった人、あるいは障がいをもった家族や、介護の困難な高齢者を担う責任のある場合、そのときも、担いきれない重さに苦しまねばならなくなる。

「星の王子さま」という童話に、ある星に酒飲みがいた。王子さまが、なぜ酒を飲むのかと尋ねたら、彼は、

「忘れたいからだ」と答えたといいところがある。

これは、自分自身や周囲の人たちの罪深い現実に日々直面して、それをひとときの間でも忘れて、アルコールという化学物質の力で一時的に陽気になり、重荷などなかったような気持ちになりたいということである。どんな人でも担えない重荷、それは死の力が迫ってくることだと言えよう。さまざまの内容をもった各人の日々の重荷の苦しみも、それは、その重荷が死に近づかせようとする力をもっているからである。

この詩の作者は、日々の重荷を担って下さる神は、人間の最終的な重荷である死ということからも解放して下さるということを知っていた。

主イエスは、「疲れた者、重荷を負う者は、だれでも私のもとに来なさい。休ませてあげよう。」

(マタイ11の28)

と言われたが、この言葉は、上にあげた聖句と響きあうものである。

たしかに、キリストは死の力に勝利され、私たちに復活の力を与え、最終的に死の力からも解放されることを約束してください。

この真理を信じていることができるのは何と大きな恵みであるだろう。

苦しみと主の真実

私たちは、それぞれにこの地上の生活において、何らかの苦しみに出会うのは、必然的なことである。

それは病気、また孤独、あるいは事故、罪のゆえのあやまち、また災害：等々、人によってその苦難はそれぞれにことなり、当事者でなければ到底その本当の苦しさを悲しみはわからないであろう。

そうしたさまざまの苦しみは、何らかの神からの深い意味、メッセージが込められているというのが、いまから数千年昔の信仰の人の思いであった。

：主よ、あなたの裁きが正しいことを

わたしは知っています。

わたしを苦しめられたのはあなたの真実のゆえです。

(詩編119：75)

私たちに日常生活のなかで、さまざまの苦しみや悩みが生じる。それは身近な家族、

職場、あるいは友人との問題や自分自身の罪、あるいは他者の罪による苦しみがあふ。さらに他人には分かってはもらえない病気の痛みや苦しみがあふ。

それらすべては一体目的があるのか、実際に私たちがさまざまの困難に直面したときには、そうした事態がなかなか考える余裕がない。

なぜ自分はこんな苦しい目に遭わねばならないのか、そのことを考えても分からないことが多い。しかし、なぜなのかという意味を、すべてをご支配されている神に向かって繰り返し求めていくとき、そしてそのよ

うな苦しい出来事からいくらか時間を経て、心を静めて祈るとき、神は愛の神であるゆえに、悪いことをす

ることはあり得ない、人間のように悪意をもって苦しめるといふことは決してない。この苦しみもはっきりとした目的がある、というように導かれていく。この詩の作者は、自分の苦しみが神の真実のゆえだった、という驚くべき実感を記している。

ふつうはこの逆であり、自分だけこんなに苦しみに投げ込まれるのは、運命が自分を迫害しているのだ、あるいは〇〇という人間が悪いからこんなことになるのだ、といったように何らかの悪意が自分を苦しめている、というように受け取ってしまう。

私たちを苦しみに陥れる偶然的な事故や災害、あるいは人間の悪意など闇の働きのかなたに、神の愛と真

実が見えてくるような世界、それこそ私たちが求めていることである。

地上のいかなる汚れや悪意にもよらずにその輝きを放ち続けている夜空の星の澄んだ輝きは、そのような世界が私たちの身近なところにある、ということ語りかけている。

地上では途切れ途切れの弧であつても：

この世での生活と、復活させていただいた後の天における完全な生について、イギリスの広く知られた詩人 (*) が次のように歌っている。

(*) ロバート・ブラウニング 1812~1889年、イギリスのその時代の代表的詩人。

地にては壊れた弧。
天上では、完全な円となる。

On earth the broken arcs;
in heaven a perfect round.

この地上では、完全なものは何もない。一時的に造られても何かの打撃を受けるととたんに砕け散ってしま

う。
いかに神のことを信じ、よきものを目指すためにこの世のものを捨てたような人であっても、特別な出来事が生じると、狼狽してたちまち逃げてしまう。そしてかつてはおもってもみなかつたような、嘘を言ったりしてしま

う。
見かけは完全な円に見えることがときとしてであろうとも、それは仮初めの円であ

り、影のようなものである。キリストの弟子たちはまさにそのような状態だった。

キリストから、3年間も一日中ともにいて生活も同じ

くし、主イエスの他に類のない神の言葉をきいてきた。

その以前にはきいたこともない奇跡の数々も直接に知らされた。それにかかわらず、弟子たちは、イエスが

無惨にも逮捕され、連行されていくときには、たちまち逃げ去って、すぐあとで、

一介の女性から、あんたもあのイエスという者の仲間だった、と言われるとたち

まち、イエスなど全く知らない、と強い調子で否定し、さらに別の者にも言われて

それも否定し、三度までもそのようなことがあった。

イエスのひと言で、家族や職業までも捨て、そして毎

日イエスに従ってそのだれも語らなかつたような権威とわかりやすい言葉に無限の叡智のこめられた教えもつねにきいてきた。

それゆえに、彼ら弟子たちは、周囲の人からみたら、あるいは弟子たち自身も完全な円のように整って見えたことであろう。

それは、イエスが自分がまもなく捕らわれて十字架で

処刑されると言ったら、ペテロはイエスをこともある

うに、自分のほうに引き寄せて、そんなことがあつてはならない、と叱つたとい

うほど、自分は偉いのだという慢心がふくらんでいたのだ

つた。
そうした見せかけの円にたとえられる忠実な弟子の姿がこなごなとなり、一介の虚偽をいう罪人だと思ひ知

らされた。

そんなことは、この世でだれの身にも常に生じている。

また、生きているときからその人生は悪の力にはまり

こみ、悪事を重ねてさらしものになって激しい苦痛の

なかで死んでいくという人もいる。十字架のキリストのとなりで処刑された重罪人がそれである。

かれのそれまでの人生は、不完全な弧どころか、幼児

のときの愛らしい円状の存在が、さまざまの悪の誘惑

にあつて敗北し、幼な子のときのようなものが粉々に

され、悪の手下のようになつたゆえに、彼の十字架処刑

となつたであろう。
しかし、そのような存在

地上にあるあいだから、すでにその粉々となったものが円のように新たに生まれかわり、その日のうちに完全な円となることがあなたは今日、パラダイスにいるのだというイエスの言葉からうかがえる。

地上でいかに悪の力に砕かれて生きていけないほどとなっても、なお、そこから主を仰ぎ見るものは、ただそれだけで、イエスよりはるか数百年も昔の預言者が言っている。

：地の果なるすべての人たちよ、私を仰ぎのぞめ、そうすれば救われる。(イザヤ書45の22)

この詩の全文の訳とともに、原詩を次に引用する。

決して失われる善はない！
かつて存在したものは、以前のまま生き続ける。

悪は無に等しく、無価値である。また沈黙(静けさ)である。だがそこからある響きが暗示されている。(*)

善きものであったものは善きものであり続け、悪のためにこそ、さらに多くの善が輝く。

地上では不完全な弧があるが、天上では完全な円がある。

There shall never be one
lost good!

What was, shall live as
before;

The evil is null, is nought,
is silence implying sound;

(*)

What was good shall be
good, with, for evil, so

much good more;

On earth the broken arcs
; in heaven a perfect
round

(*) The evil is silence
implying sound; というのはわかりにくいのが、「悪は無であり、それゆえ何もみださな静けさ(沈黙)でもある。響きを暗示している。その本質は無である悪はその存在によって、善そのものをいっそう際立たせている霊的な響きがにじみでている。」といった意味。)

この詩には、善そのもの―神は決して失われることなぐいかなることがあろうとも、生きて存在しつづけるのだ、という確信が流れている。

神をなきものにしようとする悪の力は、強力に見える

が、実は無である。そしてそのような無である悪の力がこの地上にはびこっているが、そこからさえ、かえって善そのものの永遠性を浮かび上がらせるといいうある種の響き(sound)をかもしだしている。

善そのものがいかに攻撃を受けて一時的にはまたある地域その他で部分的に滅ぼされたようにみえても、それは一時的なもので、善そのものはずっと善きものでありつづける。

悪がはびころうとも、その背後でいっそう悪に勝利する力が浮かび上がってくる。そうした状況は、地上ではばらばらの砕かれた円弧であつても、天においては、完全な円なのである。

この詩に記されている状況

は、イエスの十字架においても見る事ができる。

イエスは地上にあつて究極的な愛と真実、そして正義を貫いて短いその伝道に命を注いだ三年間の生涯を歩まれた。

しかし、生前は、その伝道の最初から、真理を語ったとき、はじめはイエスの力あることばに驚嘆していた人たちも、数百年も前から自分たちの罪を指摘されて、怒りだし、イエスを崖から突き落とそうとまでした。

しかし、イエスは、彼らのそうした激しい敵意のただなかを通つて去つて行かれた。(ルカ4の24〜30)

そしてその後も、律法学者やファリサイ派の人たちから激しく憎まれるようになった。ついに神を汚したという

汚名をかぶされ、死刑を要求するほどにまでなつて、ローマ総督でさえ、イエス

には罪はないと言つていたのに、同じユダヤ人である彼らからの敵意によつて十字架に釘付けという極刑となつた。

そして、その全身を貫く激痛のさなかで、「わが神、わが神、なぜ私を捨てたのか！」との激しい叫びをあげて息絶えていくという壮絶な死となつた。

これは、その生涯はなめらかな円どころでなく、ずたずたに寸断されたようなものだった。

しかし、そのような恐るべき悪意の勝利とみえた十字架が、全人類の罪というはてのない重い課題の完全な解決のための神のわざとなつた。

天においては、罪の赦しという歴史上で何人もまったく不可能であったことを成し遂げられたという意味で、完全な円を描くものとなつた。

さらにその三日後の復活ということで、これも全人類がうち勝てない死という力にうち勝つ道を、神の力によつて復活し、人間の究極的な課題である死に勝利する道を世界に指し示したのだつた。

このことも、またいかなる人間のわざも一歩も及ばない不可能な事を可能にしたというところで、完全な円となつた。

ユダが前もつて計画的にイエスを金で売り渡したという大罪の罰はユダが受けたが、そうした悪事は、この世には現代までもいくら

でも生じてきた。

しかし、そうした悪によつてもすべてを見抜く力を神から与えられ、また武力を神の力で用いるなどもないさいせず、みずからユダが手先となつて導いた武力装備した一団に捕らわれていった。

こうしたイエスの最後にまつわる悪の力も、それはイエスの神性を深く浮かび上がらせるといふことになつた。闇の力はそれ自体無であり、神の前には無力であるが、そこから神の愛やその力がいかに大いなるものであるかということが、その闇の力のなから浮かび上がつてきたのだつた。

使徒パウロは、こうした地上での切れ切れの弧は、天では完全な円となる―それ

を次のような言葉で示した。

：神を愛する者たち―すなわち御計画にしたがって神から呼び出された人たちは、万事が共にはたらいて益となることを私たちは知っている。(ローマ8の28)

地上ではどうしてこんなことが起こるのか、なぜ自分にほかの人にはないような苦しいことがふりかかってくるのか：等々、いろいろな出来事が自分の現在や未来を砕くようにみえても、主のご意志によって選ばれ、この世から呼びだされた人において、そうしたばらばらに見えるものがすべていけば完全な円となつてつながらのだということになる。

そして、聖書の詩編が、じつにさまざまの苦難、裏切りや迫害、病氣、また戦争などのこの世の修羅場のなかからの叫び、祈りが多く含まれているが、最終的に詩編の終わりのいくつかの詩においては、ハレルヤ！の大合唱が響いてくるような内容で締めくくられている。

：天において、主を賛美せよ

日よ、月よ、輝く星よ、

火よ、雹よ、雪よ、霧よ、

御言葉を成し遂げる嵐よ

野の動物たちよ、

翼ある鳥たちよ、

主の御名を賛美せよ

山々よ、すべての丘よ、

地上の王たちよ、

若者よ、老人よ、幼な子た

ちよ

主の御名を賛美せよ

威光(威厳)は天地に満ちている。

主に新しい歌を歌え

主は苦しむ人々を救いによって輝かせる。

主の力のあふれる大空において

その力強い御業のゆえに、

その大いなる力のゆえに

神を讚美せよ！(詩編148〜150より)

これも、地上の数々の闇、

苦難や悲しみもあろうとも―

すべてが細切れとされた弧

であつても

天の世界を知らされた者は、それらすべてが神の力によつて完全な円となっているの

を実感する。

それゆえに、天地万物とともに賛美せずにはられないあふれる心を表しつつ、壮大な内容の詩編が閉じられている。

私たちの毎日の現実、世界の現実、到る所で壊れ、心身の痛む傷があふれている状況である。

しかし、そうした破片ちらばる弧のようなものが、主の時いたれば、それらが美しい完全な円となっていく。

この世にあつても、聖なる泉の水を飲むことによって、そのような粉々になった私たちの心も主の愛によつて欠けるところなき円となしてくださる。

川の流れのように

戦後80年を経て、軍備は世界的に増強されていく傾

向にあり、ドローンやロボットなどをもちいた新兵器も発達し、夥しい核兵器も保有され…。

憲法9条の精神はどこに行っただのかと思われるほどに、日本は公然と巨額の防衛費と称する軍事費増強がなされつつある。また、あれほどの被害があり、この巨大地震や大津波の危険性の高い日本での原発の立て替え、また新設などのことも公然と言われるようになった。

いつの時代においても、一部の政治家や軍事にかかわる人たちの考えが重要視されて、一般の民衆の意見や気持ちは無視されていく。そのような目に見える世界の状況だけを見ているならば、知れば知るほどにこの世に絶望してしまうであろう。けれども、はるか数千年前

からこうしたこの世の状況と全くことなる世界をみつめて歩む人たちが生み出されてきた。

それは、このような人間世界という平面をみるのではなく、そこに立ちつつも、目に見えない世界からのおとずれを聞き取る人たちが生み出されてきた。

そのような人の一人が神から受けた啓示をしるしているが、次はその一つである。

…わたしの戒めに耳を傾け
さえるなら

あなたの平和は川のように
正義は海の波のようになる。
(イザヤ書四八の18)

平和を川のように、と感じる人は少ないのではないか。また正義を海の波のようだ、

といった表現も大多数の人にとって見たこともない表現であろう。

平和とは、何も戦争のようなことが起こらない静かな状態をいうと思われている。しかし、戦後80年、憲法9条のおかげで、他国の戦争に加わらないで、日頃からの経済援助や、医療やその他の技術提供、文化的交流等々によって平和がたたれるようにとの活動がなされてきた。

しかし、この憲法9条のものであっても、人間の心は戦争のもととなつていて自分中心の考え、金や権力の力で弱い立場の人たちを利用する、差別する、また利害が衝突して憎しみが生じ、事件となつたり、またいじめやネットを用いた犯罪、

また7のなかでも自殺者の多いこと…等々、決して心のなかまで平和、平安であつたということにはつながらないことも多い。

武力による戦争がなくなるとも、目に見えない心が相手を憎み、恨むことで戦いの状態となつていることも多い。

そうした人間の精神的な方面での戦いは、いかに平和的に見える世の中であつても存在しつづけていく。

聖書はそうしたすべての出発点である、一人一人の魂のなかにおける平和・平安をいかにして人々が受けとるのがということが中心的な課題となつてきた。

そしてその問題は、すでに旧約聖書からみられる。

イザヤ書のこの箇所にある内容は、単に何事も波だつたことのない静かな心の状

況を指しているのではない。そのような静かな心というものは何か突発的な出来事があったらたちまち壊されてしまう。

それに対して、旧約聖書のこの個所では、平和というのは、たえず流れ続けるものであり、正義も絶えず打ち寄せる波のごときものとして言われている。

そして、このような動的なもの、あふれ出るという特質は、聖書の最初から言われている。それはエデンの園の四つの川ということを示されている。

ヘブル語では、平和、平安とは「シャローーム」という。この動詞形は、シャーラム、またシャーレームという言葉葉であるが、これは、神殿が「完成した」という個所にも用いられていることか

らわかるように、もともとは、「完成する」という意味なのである。

平和、平安という言葉(漢字)は、本来中国語であったのを日本に取り入れて使っている。

この言葉からして、平らで、和は、のぎ偏で穀物を意味しそれを口で食べ合うことでの人々との交わりとか、平らで安らかというのであって、ヘブル語のように完成するといったニュアンスはない。

シャローームというのは、そうした言葉のもとから考えると、平和とか平安といった中国からの由来の意味とはことなり、完成された状態、を意味している。

私たちが、神を信じ、神の力で支えられているときには、私たちの波立つ心とか

人々からの悪意などで混乱する心の状況が静まり、おのずからそうした外部からの誹謗、攻撃などをうけても、動じないということになる。

私たちの心が神の力や真実、愛で満たされるなら、おのずからそこから周囲に向けて流れだしていく。

正義とされるということは、私たちが縁遠いものと感じられがちだが、キリストの十字架による私たちの不正(罪)の赦しを信じるだけで、神の前で正しいのだとみなされるようになった。

それは、新約聖書の福音の中心となっている重要なことであり、そのような信仰によって私たちは神から正しいとしてくださる。そうになると、私たちはつねに罪をおかす弱きものであるに

もかかわらず、そのたびに十字架を仰ぐことで、罪赦されて日々新たな力を与えられる。

その赦しを海の波のように日々受け続けていくーそれは義とされたものへの赦しの言葉の連続のようなものになる。

私たちの生活は、健康であっても、勉強やスポーツなどで他者との競争、戦いのようなものに巻き込まれがちであるし、病気になることとあせりと不安、また友だちも来てくれない等々で、心は縮まってしまいう人も多い。

そうしたことから、私たちにとって平和や正義が流れるように、また次々と打ち寄せる波のようだとは到底感じられない人々が多いと思われる。

それでも、このイザヤ書の

言葉は、神からの平和や信仰によって神から正しいと
していただいた心にとつて
は、その罪の赦しを与えら
れる喜びゆえに平安が川の
流れのように、心で実感する
し、他方、正義などおおよそ
縁遠いような罪深きもので
あっても、十字架の赦しを
つねに受け続けることで、
それも赦しという神の愛そ
のものが打ち寄せる波のよ
うになるという実感を与え
てくれる。

この世界の平和は、こうし
た一人一人の魂の奥深いと
ころでの出来事がもとにあ
る。そこから人々の集りに
もそのような平和が流れ始
めていく。

心に残っている御言葉

「よくなりたいのか」

加藤 久仁子 (徳島)

皆さん、おはようござい
ます。加藤です。今日の私
の心に残った御言葉は、ヨ
ハネ5章の6節「イエスは、

その人が横たわっているの
を見、また、もう長い間病
気であるのを知って、「良
くなりたいか」と言われた。」

イエス様が病気でずっと
動けない男の人に言われた
その言葉、「良くなりた

いか?」それは私は前から
ちよつと不思議な言葉でし
た。当たり前私たちは病
気やら、いろいろな試練を
早く無くしたいと思ってい
ます。それなのにイエス様
は良くなりたいたのか?とわ
ざわざ聞いてくださる。

それは置いといて、最近
私はとつても物忘れして、
自分の忘れたら困ることは
左手の甲に書くんですね。
そうしたら忘れるのが少な

い。でも、神様はイザヤ書
49章16節のところ、

「見よ、わたしはあなたを
わたしの手のひらに刻み
つける。」と言って下さっ
ている。神様は何でもでき
るはずなのに、忘れないよ
うに、私たちのこと、愛す
るために、手のひらに刻む
んですね。

さて、さっき言った、イ
エス様が病気の男に聞いた、
良くなりたいたかというその
言葉は今も私に聞かれてい
るといふのを思いました。

たとえば、朝、はじめに聖
書を読んで祈ると吉村さん
が言うけれども、やっぱり
忘れることがある。忘れな
いように、本当に私の本心、
本当の気持ち。神様に従っ
ていく。神様の弟子となる。
本当にそれを確かめて、気
持ち、覚悟があるかと、神

様は聞いてくださっている
と思えました。以上です。

(5/22の主日礼拝にて)

心に残っている御言葉

あなた方のために立てた
計画を...

林 晴美 (徳島)

心に残っている御言葉は、
エレミヤ書 29章11、13、14
節です。「わたしは、あな
たたちのために立てた計画
をよく心に留めている、と
主は言われる。それは平和
の計画であつて、災いの計
画ではない。将来と希望を
与えるものである。：わた
しを尋ね求めるならば見い
だし、心を尽くしてわたし
を求めらるなら、わたしに出
会う、と主は言われる。」

生まれつき足の浮腫があ
り、原因も分からないまま
子供時代が過ぎ、20歳の

ときに蛋白漏出性胃腸症の診断ができました。けれども28歳ではじめて左側の胸水が貯まり入院するまでは正社員で働くことも出来ていて、そんなにむつかしい病気とはとらえていませんでした。33歳の時には胸水の量が増え入院、咳喘息も発症し、左腕の浮腫も出現しました。3年前には右側の胸水が増え、ステロイド治療は今も続いています。

症例が少なく、私の症状が増悪するたびに主治医の先生方も毎回模索しながらの治療となり、くわしい説明を聞くうちに私も病気に向き合う姿勢ができてきたように思います。

28歳の退院後は15年間の結婚生活、父が亡き後9年間の母との同居を経て、

ひとり暮らし5年目です。

4回の入院やその後の生活環境、身体の状態は変わりましたが、すべては神様の立てた御計画の中にあり、35歳で集会に私を導かれ、主を求め続ける者とされるためであったと思わされています。診断されてから35年、信仰を持つ前の15年と持った後の20年、この違いは大きいと思います。
(95.3.2の主日礼拝にて)

お知らせ

○イースター特別集会

4月20日午前10時～13時

いつもの主日礼拝は、10時半からですが、イースターのときは、10時からです。

内容は、イースターメッセージ、参加者による感話(日々

の主の恵みへの感謝。証し、心に残る御言葉、讃美歌などの歌詞、読書からのことなど)、賛美タイム等。

○スカイプからグループミーティングへの移行について
私たちの徳島聖書キリスト集会で、大学病院に長期入院の寝たきり、人工呼吸器装着で、首から下がいつさい動かせない勝浦良明さんが礼拝集会にオンライン参加できるようなとの目的で、スカイプを併用するようになったのが、2010年3月でした。それによって勝浦さんも病室から毎週礼拝に参加できるとい道が開かれ、それから15年間、スカイプを使つてのオンライン参加ができ、今日に至るまで多くの県内外の方々が

参加できてきました。

コロナの大流行で対面での礼拝集会が全面的に停止された期間であっても、ほぼ全員がスカイプでのオンライン集会として継続できてきた。

そのスカイプが今年の5月5日から使用できなくなり、代わりにマイクロソフトチームズ (Microsoft Teams) というものに移行すると連絡が入り、スカイプなどの連絡先などはそのまま受け継がれるので、数人の徳島聖書キリスト集会の方々によってその移行のための対応をしてくださっているところですよ。

そのことに関しての問い合わせは、末尾の吉村孝雄または、次の方々に直接にメールで、またその方々の電話

は番号は吉村に問い合わせ
あったときにお知らせしま
す。

・数度 勝茂 Kadoshks7@mb.
pikara.ne.jp

・貝出久美子...staurostoko
@ma.pikara.ne.jp
・林晴美...beatitude.392.
eudia@gmail.com

○近畿無教会集会

・主題: 「福音の希望ーコロ
サイの信徒への手紙に学ぶ」
日時 2025年5月10日
(土) 午後1時~11日(日)
午後1時。

場所: 関西セミナーハウス
〒606-8134 京都市左京区一
乗寺竹ノ内町23
TEL: 075-711-2115
交通: JR京都駅から
○地下鉄烏丸線 北山駅16分下
2番出口、タクシー約10分
○市バス⑤系統に乗車、約50

主筆・発行人 吉村孝雄 (徳島聖書キリスト集会代表) 二七七〇〇〇〇四 徳島市南田宮一丁目1の47 電話 080-6284-3712 固定
0885-32-3017 (FAX共) E-mail: emuna@ace.ocn.ne.jp ○この冊子は、読者の方々からの自由協力費で作成、発行しています。
協力費をお送りくださる場合には、次の郵便振替口座を用いるか、千円以下の場合には切手でも結構です。
郵便振替 口座番号 01630-5-55904 加入者名 徳島聖書キリスト集会 ○http://pistis.jp (「徳島聖書キリスト集会」で検索)

分。「修学院道」下車 徒歩

15分

会費: 全日参加 一万七千円
一泊3食、11日の昼食代も含

む 部分参加 二千元

日曜昼食 一五〇円

申込先: 宮田咲子
〒589-0004 大阪狭山市東池尻

1-2147-1-1-114
Eメール saiwai1950@yahoo.co.
jp

電話: 072-367-1624

携帯: 080-6134-5618

会費は郵便振替にて

郵便振替番号 00980-2-246936

加入者名 宮田咲子

プログラム 予定

10日(土)

12:30~13:00 受付

13:00~14:10 開会礼拝

聖書講話 木村護郎クリストフ

14:20~15:00 賛美タイム

自己紹介・証(1)15:00~15:30

休憩・写真撮影 15:30~18:00
自己紹介・近況報告(2)
18:00~19:30 夕食・自由時間

19:30~20:40 夕拝

グループに分かれて

21:00~22:00 若者の会(希望
者)

11日(日) 6:30~7:30

早朝祈禱会 散歩

7:30~8:50 朝食、自由時間

8:50~11:00 主日礼拝

聖書講話(1) 小舘美彦

聖書講話(2) 吉村孝雄

11:20~12:20 閉会の集い

参加者の感想・分かち合い

12:20~13:20 昼食

○多くの方々からのお祈り、
来信、そしてその祈りの込
められた協力費を感謝です。
去年の晩秋のころから妻の
恵美子さんの病状が全面介
助の状態となつて、そのた
め妻は、急な山坂を登る小
松島市の山の家には帰れな
くなり、徳島市、そして板
野郡北島町など三カ所を往
復などせねばならなくなり、

時間もさらに多くとられて
いろいろな返信などもでき
ないままになることが多く
申し訳なく思っています。

○集会案内

主日礼拝 毎週日曜日 午前

10時30分から。徳島市南田宮

1丁目目の集会所とオンライン

併用。
以下は、天宝堂集会と、第四

火曜日の北島集会は対面とオ

ンライン併用。海陽集会はオ

ンライン(スカイプによる)

集会。参加希望の方は、左記

奥付の吉村まで連絡ください。

○夕拝: 毎月第一、第三火曜

日夜7時30分~9時

○家庭集会

① 天宝堂集会: 毎月第二金曜

日 午後8時~9時30分

② 北島集会: 戸川宅にて

(対面とオンライン併用) 第

四火曜日13時~14時半

・第二月曜日 午後1時~

③ 海陽集会: 毎月第二火曜